



「福音の真理」を伝える伝道者を、いまの世に



創立

日本における諸教派の合同によって、1941年(昭和16)日本基督教団が設立されました。創立総会において、教職養成機関の必要が提議され、そのために必要な処置をとることが決議されました。

それに基づいて1943年(昭和18)3月、既存の15校の神学校が合併して、2校の男子神学校と1校の女子神学校が設置されましたが、男子神学校はさらに〈日本基督教神学専門学校〉に統合され、教団の教職養成の責を担うこととなりました。

戦後の変革期において、独立再建される神学校も生まれましたが、日本基督教神学専門学校は女子神学校を吸収し、1949年(昭和24)新制度による大学に移行して、〈東京神学大学〉となり、私立学校法の公布に伴って、1951年(昭和26)3月に〈学校法人東京神学大学〉に組織変更をして今日に至っています。

したがって、東京神学大学は日本基督教団の教職養成の責を担うものでありますが、それとともに合同教会としての教団の世界教会的理想に従い、より広く日本の諸教会、アジアの諸教会の教職養成に貢献し、日本の宣教のみならず世界教会の宣教に奉仕しています。



創立の背景と歴史

創立者ミス・カートメルはカナダ・オンタリオ州に生まれ、信仰の篤い養父母のもとで育ち、30代後半にはハミルトン市の官立女学校の校長職にありました。折しもカナダ婦人ミッションが結成されて日本への初の女性宣教師を募ったとき、彼女は強い召命を覚えて進んでその任を受け、わずか3カ月後には日本に向けて旅立ちます。

横浜に上陸したミス・カートメルは、驚くべき行動力で本国カナダの教会に働きかけ、来日2年目にして東洋英和女学校を創立。わずか2名の生徒から始まった学校は、折からの欧化主義政策の時流にも乗り、発展していきます。ミス・カートメルは学校だけでなく広く一般にも伝道したいと願っていました。重いリウマチのために家に閉じこもりがちだった女性の要望に応じて訪問したことがきっかけとなって女性のためのバイブルクラスが始まり、青年たちとのバイブルクラスはのちの築地教会に発展します。

開校の翌年には、過労がたたってミス・カートメルは体調を崩してしまいます。ミス・スペンサーがカナダから来日し応援に加わりましたが、ミス・カートメルの体調は回復することなく、ついに学校の運営を後任のラーズ校長(トーマス・A.ラーズと結婚したミス・スペンサー)に託し、カナダに帰国しました。その後はミス・カートメルに続く宣教師たちがその働きを受け継ぎました。

ミス・カートメルは1892年(明治25)再来日し、一時期、東洋英和でも伝道活動に努め、1894年(明治27)から2年間、山梨県の甲府に滞在し、Kofu Boy's School(のちの有朋義塾)の英語教師となりました。帰国後もカナダ各地を巡回しては〈東京の学校〉について語り、のちに続く女性宣教師派遣のために尽力し続け、第二次世界大戦が終わる年に99歳の長い生涯を閉じました。

後任となったミセス・ラーズは、時勢に流されることなく、堅実に東洋英和の基盤づくりを進めていきましたが、1890年(明治23)4月4日の夜半、校舎に押し入った強盗によって夫のトーマスが殺害され、彼女自身も重傷を負う悲劇が起きました。欧化主義の退潮と重なって一時期学校経営が危うくなる局面もありました。

しかし、ラーズ校長に続くブラックモア校長は懸命に学校の立て直しを図り、「訓令第12号」によるミッションスクールへの圧迫にあっても基督教教育を貫き通しました。その後もマンロー校長、クレイグ校長へと厳しくも心豊かでこまやかな女性宣教師たちによって、教育の業は引き継がれていきました。1934年(昭和9)に創立50周年を迎え、東洋英和の学校としての体制を確立したのはハミルトン校長でした。

現在の東洋英和は幼稚園から大学・大学院までを備えた総合学園へと発展しました。卒業生たちは、東洋英和の建学の精神である「敬神奉仕」の心を学び、社会にあっても家庭にあっても神を畏れ人に仕えることを喜びとし、日々の業に努めています。



東京神学大学 校章・マーク
十字架をデザインした図形の中に、学校名のTokyo Union Theological Seminaryを配したもので、ΘΕΟΛΟΓΙΑはギリシャ語でTheologyを表わしています。

学校法人 東京神学大学

〒181-0015 東京都三鷹市大沢3-10-30

TEL: 0422-32-4185 FAX: 0422-33-0667